

室生犀星全集

第六卷

新潮社

室生犀星全集 第六卷

昭和四十一年十二月五日 印刷
昭和四十一年十二月十日 發行

著 者 室 生 犀 星

發行者 佐 藤 亮 一

印刷所 二光印刷株式會社

發行所 株式會社 新 潮 社

東京都新宿區矢來町七一
電話東京(廻)三二六代表
振替東京八〇八番

定價 一五〇〇圓

室生犀星全集 第六卷

題
字

編
纂

西
川
寧

奧	福	伊	窪	中	三
野	永	藤	川	野	好
健	武	信	鶴	重	達
男	彦	吉	次	郎	治

第六卷
目次

小
説

戦へる女	九
龍宮の掬兒	三六
悪い魂	二九一
獵人	三〇五
會社の圖	三八
斧蛭圖	三三
熊	三四七
足	三六二

隨筆・評論

〈慈眼山隨筆〉

詩よきみとお別れする	三七一
齒痛音楽	三七六
十月の日記	三七九
中野重治君におくる手紙	三八一
詩への告別に就て萩原君に答ふ	三八五

〈文學〉

復讐の文學	三九〇
文學的自叙傳	三九九
小説の嘘	四〇九

俳句は老人文學ではない	四二三
日録	四二〇

〈薔薇の羹〉

母を思ふの記	四三二
餓人の發句	四三四
書物雜考	四三五
人物と批評	四四一
悼文	四四九

〈印刷庭園〉

衢の文學	四四五
------	-----

再生の文學	四三
「あにいもうと」上演記	四六
ドストイェフスキ軍隊	四七
作中の女性	四五

復讐の文學に就いて	四七
『人生劇場』の鬼ども	四三
悪魔の接吻	四五
新聞小説に就いて	四六

後記

峠を越す	四五
解題・校訂	四九
	中野重治
	伊藤信吉

小説

戦へる女

「戦へる女」序文

本篇を起稿しはじめたのは未だ永い冬の最後の餘寒が襲うてゐる、二・二六事件直後のことであつた。そしてこれらの老大な原稿の終りに達したいまは、若葉も老いた夏のはじめに季節はすでに移つてゐた。私が作家として十九年もの永い間、斯くのごとく原稿を半歳の永きに互つて手許に置いたためしは、ただの一度もなかつた。朝に書いて夕にこれを印刷に附してゐた私は、心ゆくまでに毎日書きためられて行く原稿の綴りを打眺め、日夜痴情に堪へざるもののごとく本篇に没頭してゐたことは、全く作家としての従軍的な踴躍を感じたものに外ならなかつたのである。私は私の全集の爲に敢てこれを爲し遂げたことも、私が決して一介賣文の徒でなかつたことを心から愉快に感じるものである。

本篇に於ける矛盾混亂、執拗なる性格鬼らの群むらがりはそれだ

けに既に懊惱的ではあるが、それらの性格心理の凡てが瞬刻の間に變つてゆく美しさに私もまた人生全體もこれを均しく認めるであらうと思ふのだ。そして本篇もまた凡ゆる人物に主人公を置かず、それぞれの立場からそれぞれの主要人物のごとき取り扱ひを加へたのである。元來はその善惡いづれに行き着いても到底惡の彼岸に辿りつけない人びとであるが、彼等は敢て口々に正義と善良とを喚び合ひながら結果は何時も反對の罫を編ふものに過ぎなかつたのである。安土清造、神部意志、伊豫伊平、火渡毅、鴨居元、鹿兒安正、書店運堂主人、旅館好文館主人、山名唐太の九人、及び、初島豹、萩田みや子、阿島章相子、間瀬枇杷子、鹿兒加奈子、お韓ちゃんの六名の女性、特に複雑な人生にありながらより能く戦ひ抜いた人びとであつた。これら撥亂たる人生に作者として分け入ることは、作者であり得て初めて到達する未開墾の境致であつて半歳の永き間、實に飽くことなく汎濫した魂の仲間とともに彷徨を續けた所以、皆ここにあるのである。

就中、神部意志や鴨居元及び好文館主人に於て、果しなき

痴情の夕暮を見、用なきその精神の昏迷がいかに人間臭いものであるかに、私は熟々善惡混淆された人間の姿を凝然として打眺めたのである。凡ゆる人間はその精神の善き實にのみ生活することが出来るに、何時も行爲は現世に於て逆に表現されるがため数々の小さい事件は紛糾を醸酵し、遂に悪い方向のみが行動されてゆくのである。殊に、本篇中の女性の悉くに互つて新しく學び得たことは、私がこれらとともに危ふく溺れんとしたくらゐの、それほど豹やみやっぺえやお韓ちゃんや枇杷子らを、特に勇敢な戦ひを爲し遂げたことで新しい恍惚を感じたからであつた。私のまなかひに久しい以前から滯つてゐたこれらの女性と何時かは膝を交へて物語る機会を、私は永い間空想しながら時の臻るのを俟つてゐた。そして今はそれを爲し遂げたのである。

本篇の最後の枚数である千三百何枚かに達したときも、些も私は疲勞困憊を感じなかつた。私は更に長篇小説としての展がり亦岐れゆくところ、悲嘆永きに互る人間の使命について、或はそれらの記號が長篇の場合は奈何にして打續けられるかを、殆ど、平常考へもしないことを、自描きながら會得し、また自あさうであつたかと領いた程であつた。かういふ學問にひたと辿り着いたことは貧弱な今日の私をして更に雀躍せしめた程である。何人も汝これを爲し遂げざるべからずといふ命令を背後に聴く時、軍人でも音楽家でもない我文學の徒は書いて衝き抜けて、潤達無雙な別の世界に突如として跳り出なければならぬのである。

昭和十一初夏於大森

第一章 籠すっぽんの歌

千九百二十何年かのころ、日本の文壇にひと若り書簡の形式を採つた小説が流行した時代があつた。多くは女から男におくる様々な心理描法がおもであり、鳥渡讀みやすく優婉な女心を多かくに簡單明瞭な形式であつた。作者の側からいつても何となく書きやすく事件や筋のはこびも甘くなりがちではあつたが、手紙文の性質から薔薇の花くさいところと若い女の氣はひや匂ひがあつて、なんとなくその時代の好尚に投じたのであつた。

わが安土清造の思ひ付きも多分この點にあつたのであらうが、それは克明に類分けにされた全篇二百何十通かの手紙文を、それぞれ敘情たつぷりな小説的に書き上げたものであつた。たとへば令嬢的なものと女學生的なものにはそれぞれ心理の違つた表はし方をし、妻君とか夫人とかいふ生活に親しんでゐるものにはそれらしい巧緻な戀愛的な書き方を試みたりしてゐた。これらの敘情文は一讀面白いには面白いにちがひないが、どこか恥かしく極りの悪いことばかりが書き立てられてゐて、一面からいへば風紀上よろしくない、寧ろ、質のわるい小説的できへある極めて野卑なしろものであつた。

わが安土清造はこれらの老大な六百何十枚かの原稿には、あらゆる文學事業の數々のデリケエトな、例へば詩も含んで居れば多くの短篇小説の構圖も織り込んであるところの、夜々を徹して書き上げた鏤刻の文字であつたのである。だから安土清造はこのノアの箱舟のやうな貸間館かまやだんの經營者であるところの、肥つた氣の善い、それ故に物事に鈍いやうなお内儀うちぎさんに對つて、「この原稿さへうまく捌けてくれれば貴女の前だけれど借錢は綺麗に拂つて最つと居心地の好いところに引越して行きますよ。」と安土は苦もなく氣の毒なお内儀さんをあしらつて終ふのであるが、原稿のことは一向に辨へない彼女は老大なぎつしり書き詰められてゐる原稿の内容が、例の取り様に據つてはいやらしい事ばかりを書きならべてあることなぞ、ゆめにも知らう筈がなかつた。

安土清造は神田を中心にした大抵の小さい出版書肆の間を、けふもきのふも飽くこともなく訪ねて歩いてゐた。片ツ端から手際宜く或は露骨に斷られたが、安土はそんなことで參るやうな男ではなかつた。誰か一人熱心にこれを讀んでくれさへすれば直ぐに食ひ付ける値打のあるものであり、出版の撥はくもすらすら行くのだ。誰もこれを讀まうとする書店がないことがいけないのだ。安土は日に焼けた嚴丈などこか勞働者上りらしい顔を、その日の夕刻近くあらはした文運堂書店には折惡しく先客があつて、直ぐには談じ込むことが出

來なかつた。纏やがて小店員が取次いで兎に角原稿を拜見しようと云つてくれたが、すぐ帳場のところにある文運堂主人は勿體振ふつてぢかには話をしなかつた。小店員から受取つた原稿をばらばらとめくつて見た主人は、すぐそばにある客にそれを手渡ししながら、不興ふきやうげに冗らない人間を扱ひつけた、面白くもなささうな口調で云つた。

「近頃かういふ手紙文が流行つてゐますかね。」

「さあ、手紙文のことは一向解らんが、……いや、或は大流行かも知れませんが。」一見著作業者の風體に見える先客はさういふと、二三枚めくつたきりで原稿をどかりと疊の上に置いた。含羞あはづの外イシバ套にちらつく腕時計を捲いた手首は女のやうに白く、顔はだらりと長めに眼の細い柔和さうな笑みをたたへてゐたが、その柔和なかにしたたかに人を食つたこの先客は、さりげなく安土清造をちらりと眼に入れた。まるで見るでもなく亦見ないでもないところの無關心な眼差しではあるが、併しこの先客はその一瞥のうちに安土の凡てを見抜いて了つたのであつた。

安土清造は古雑誌を積み上げた入口からこれも先客の姿を眼に入れたが、そのぞろりとした風體がすでに氣に食はないばかりか、彼が再び原稿を手を取つて見ようとしないうでゐるのが、安土をいらつかせた。小店員が安土が中の方に這入らうとするのを押し停めるふうに、すぐ前に立ち塞がつてゐ

て動かなかつた。

「どうぞこちらに、……」

突然書肆の主人はさう店の中から聲を懸けると、はじめて安土は店の中に這入つて行つた。安土は色の着いた疊の上に抛げ出された自分の原稿を眼に入れたが、さすがに主人もそのままにして置く譯にはゆかないらしく、厭々ながら手に執つて白々しくあちこち拾ひ讀みしながら云つた。

「これは全部お書き下ろしですか。それとも編纂された原稿ですか。」

「新しく書いたものです。」

「大てい戀文のやうなものが多いやうですね。成程、これは却々小説的な描寫方法を取つてゐますね。」主人は氣のない笑ひ顔をして、神部さんこれなぞ從來に見なかつた書簡文の新しい形式ぢやないですかと、可笑しさを耐へ兼ねた莫迦にしきつた顔付で云つた。

「却々斬新だ。」

この神部といふ人物はたださう答へただけで、背伸びをして主人の手にある原稿を一目見たきり、手にとらうとしなかつた。

「そこで、これはどういふお心算で御持参になつたのです。」文運堂主人は相不變、氣のない無表情な突ツ放すやうな語調で、寧ろ、不思議さうな面持で安土を打ち眺めた。

「出版していただきたいと思つてうかがつたのです。」

「やはり原稿料とか印税とかがご入用でせうな。さういふ正式な出版契約になればですね、いろいろお話し合ひしなければなりません。」

「出してさへいただければどのやうにも書き改めます。」安土はこの途方もないうまい話を失つて、先刻から取り逆上せてゐた憤怒をも忘れてしまひ、慌てて寧ろ醜い程膝を乗り出して云つた。「短くも長くも出来るんです。かういふ短章をあつめたものですから。」

文運堂主人は安土の熱烈な昂奮振りにはまるで注意しないで、くるつと横向きになり先客に向つて尋ねた。

「あなたのお考へはどうです。」

「僕にはまるで見當のつかない原稿です。面白さうであり新しくもあるやうですが、……」

主人はこの時、突然安土に對つて先刻からご紹介をすることを失念してゐたと云つて、取つて付けたやうに此の不思議な人物を紹介した。

「神部意志さんです。やはり著述をなさるんだが、あなたとは違つて硬派の方です。硬派と云つても一口にはいへないが謂はば學問的な方面です。」ここで神部意志なる人物はただ穩やかに對手をあしらふやうに笑つて、「僕が神部です。」と云つた。そして主人と顔を見合すと又何となく笑つて見せ

た。

「僕はすぐ仕事にかかっても宜いんです。指定さへしていただければ、……」安土は氣先きをいそいで早く話を取り纏めた。此處でうまく話をつけて置かないと又はぐれることが氣がかりだった。

「いや、さうお急ぎにならなくとも宜いんです。かういふものを出版するといふことが私には氣がすすまないのです。何處か適當な書店がありさうなものだが、……」眉毛一つうごかさな主人はむしろ安土に對つて話してゐるのか、神部にさう云つてゐるのか、若しかすると獨りごとをつぶやいてゐるのか一向取り付き様のない語調で、不意にハツキリと斷つた。

「出版といふものは氣のない間は絶対に遣れないものです。

凡ゆる仕事のなかでこいつだけは氣がないとためです。」神田に三十年も出版と古本賣買の間に戦ひ抜いた文運堂主人は、それきりもう無駄口を利かなかつた。

安土清造はいきなり背負ひ投げを食つたやうな氣がし、どう、話を切り出して宜いかわからなかつた。出版の意志がありさうに見せて置いて、人を莫迦にするにも程があると思うたが、もう一遍確答を得る必要があると思つた。

「何とかして出して貰へないでせうか。」

再び文運堂の主人がこちら向きになつた時は、先刻とはも

つと落着いた聲音で、一舉に安土の空想の緒を打ち切つて了つた。

「何處かで出版してくれる本屋もあるでせうから。」

「ではいけないと仰有るんですか。」

「お氣の毒ですがうちでは斯ういふ柔らかいものは取り扱はないのです。」彼は原稿を取ると安土に手渡したが、安土は汗と膏でにちや付く手で風呂敷に原稿を包み込んで、それきり夕刻の混雑した街のなかに出て行つた。悪町囃で人擦れがしてゐて食へない文運堂主人の顔が、安土のぐらぐらする顔のなかで大聲をあげてげらげら哄つてゐた。畜生！ 安土は自分自身のなかにまだ哄つてゐる文運堂主人に對つてかう啾鳴つてから、神保町の交叉點を通り越えて行つた。

「安土君！」

見ると先刻の神部意志が灰ばんだ合着の外套を着込んで、れいの見様に據つては非常に人がらの好い莞爾した顔付で立つてゐた。併し能く見るとその莞爾した笑ひ顔の凡てがみんな扮りもののやうで、本氣はその細い眼の奥にある何かちらりと光るものに含まれてゐるやうであつた。

「何かご用ですか。」安土はこの男が先刻からの一伍一什を見てゐた男だと思ふと、突慥食な遣り放しな聲音で云つた。

「特に用事といふほどのことでもないんですがね。じつは先刻の君の原稿に就て僕の考へをお話したいと思つたのですよ。あそこでは話にもならないものだから、君がかへるとすぐ後を追つて来た譯なんです。」神部意志は腕時計を見てから又續け様に云つた。「それといふのも君は僕とは同郷らしいのでつい後を跟けて来たんです。僕は先刻のあの原稿に挟んであつた手紙の表書をちらと偷み見たんですが、荻田みや子といふ名前までもちゃんと讀んでしまつたのですよ。僕らに取つて同郷の人間はなかなか印象的な深い感銘を受けるものですからね。」

安土はこの突然に現はれた不可解な人物が、安土と同じ郷里の者であることを始めて知つたのだ。それよりもつと素速く荻田みや子の手紙を偷み見たのは、何と云つても神部意志がただ者でないことを意味してゐた。しかも先刻、原稿をちらと見ただけの神部が何時の間にそれを敢て讀む隙間があつたらう？

「とにかく昵懇^{せうこん}のしるしにつき合つてくれませんか。」神部は低い謙遜めいた聲で上機嫌らしく喋つた。「僕も冗^{くだ}らない仕事をしてゐる人間なんだが、君のああいふ非商品的な作文同様な原稿を見ると、ちよつと又三作文學に身を投じたいと思ふくらゐですよ。」

「非商品的といふことはどういふことを意味するんです。僕

はあれらの原稿では出来るかぎり通俗的に一般の好尚を目標にして書いたつもりなんです。すくなくとも、あの程度のものを一般讀者が解つてくれなければならないと考へてゐる位です。」

「あれは新選愛の書簡集と名づけるよりも、謂はば君の小品文集のやうなものですよ。渺くともこの都會にある様々な出版書店はああいふ獨り合點の原稿は容易には買入れはしません。僕の君に感じたものは君がああいふ原稿を賣りに歩くところの、出版事情を知らない生えぬきの子供同様な點に或興味といふよりも、何かしをらしさを覺えた位です。」

神部意志は汚ないが旨いものを食はせる中華亭の階段を、恰も安土清造がきつと跟いて来るに違ひないといふ確信を持つてゐるものごとく、先立つて傲然と登つて行つた。安土は神部なる人物に最初から壓倒されてしまひ、平常の不逞^{ふてい}不逞しい安土に立ち戻るまでには、容易なことではなかつた。

食卓に對ひ合ふと神部意志は直ちに酒を命じてから、君も酒はお遣りでせうなと何故か更めてさう云つた。

「君が文運堂で出した紹介狀の筆者は僕も能く知つてゐますが、一體、火渡毅といふ男は生活的にも無能極まる人間で、出版書店に人を紹介する柄ではないんです。あの男はいま何を遣つてゐます。」

「火渡は相渝^{あひあ}らずのらりくらしとしてゐますよ。唯、あいつ